

南仏の星と東方の三博士

大正初期の日本とプロヴァンス

石塚 出穂

序

日本における近代プロヴァンス文学の最初の翻訳が、明治38年(1905年)9月、上田敏(1874-1916)によって『明星』誌上に訳出された3つの短詩「白楊」「故國」「海のあなたの」であったことはすでに見た通りであるが¹、この3編を収めた訳詩集『海潮音』(1905年)が出版の運びとなったとき、上田敏は巻頭に「遙に此書を滿洲なる森鷗外氏に獻ず」という献辞を置いた。

森鷗外(1862-1922)は上田敏よりちょうど一回り年上で、西欧文学紹介における先達であった。上田は早くから鷗外訳の『即興詩人』などを愛読し、時には批判を加えながらも、その業績を非常に高く評価していたが、1902年、新しい詩雑誌の創刊を機に彼と親交を結ぶようになった。しかし1904年に日露戦争が勃発すると、鷗外は軍医部長として従軍、翌1905年も依然として大陸で軍務に服していた。このように、余儀ない事情で異郷に留められている友を思い、上田敏は『海潮音』を東京の空から彼に捧げたのである。

鷗外は1906年に帰国するが、その翌年に今度は上田敏が英仏留学に出発、1908年秋の帰国後は京都大学で教鞭を執るために京都に居を構えることになり、彼らの生活は東西に分かれた。そして鷗外は陸軍の勤務を続け、上田は新しい任地での講義を開始するのだが、『海潮音』を贈り、贈られた2人の友は、以後それぞれのやり方でプロヴァンスに係っていく。近代プロヴァンス文学の紹介についていえば、鷗外が上田敏の仕事を引き継ぐような形になるのである。

新旧の南仏文学、すなわち中世のトルバドゥールの文学と近代プロヴァンス文学の両方に関心を示していた上田敏は、京都で自らプロヴァンス語を研究し、「アイスランド語やアングロサクソン語と共に必要」だからと言って、

¹ 拙論「海のあなたの遙けき南 —上田敏と近代プロヴァンス文学—」、『仏語仏文学研究』第25号、東京大学仏語仏文学研究会、2002年4月、129-148頁。

周囲にもその研究を勧めたという²。しかし彼が学んだのは中世のプロヴァンス語であったとみえて、『海潮音』以後、近代プロヴァンス文学について書いた文章は見当たらない。

これに対して鷗外は、当時雑誌に寄稿していた海外通信において、同時代の南フランスに関する情報を数度にわたって伝えていく。なかでも注目されるのは、近代南仏語南仏文学復興運動（フェリブリージュ）の中心人物であるプロヴァンス語詩人フレデリック・ミストラル（1830-1914）の晩年の動静を伝えていることである。

もっとも鷗外の書いたミストラル関係の記事はいずれもごく短く、豊かな情報量を誇る通信全体から見るとその量は微々たるものであり、内容も系統的な紹介には程遠いが、これは大量の情報を可能な限り迅速に伝えようとする通信の性格上、致し方がない。重要なのは、鷗外が外国紙等からミストラルの名を断続的に拾い続け、その死の報告者となり、その結果、上田敏に次ぐ近代プロヴァンス文学の第二の翻訳者となったことである。

またこの頃には、文献を通じてではなく、実際に南仏を訪れて、近代プロヴァンス文学の存在を知る日本人も少数ながら出現する。これらの人々は、鷗外のような強い文学的影響力こそ持たなかったものの、自らの見聞に基づく南仏文学紹介を行ったという点で注目すべき存在であり、その中でも特に、ミストラルと直接交流していた松岡曙村（生没年未詳）と、上田敏の京大の同僚で、鷗外に続く第三の翻訳者となった考古学者の濱田耕作（号、青陵。1881-1938）は、南仏文学移入史を語る上で逸することのできない重要な人物といえる。

本稿では、『海潮音』以後、ミストラルの訃報が伝えられ、その小品が2つ翻訳される大正初期に至るまでの約10年間になされた近代南仏文学紹介の進展を、上に名前を挙げた3人、鷗外・松岡曙村・濱田青陵を中心に追ってみることにする³。

1

近代南仏文学の日本への紹介は、1905年に上田敏による翻訳が発表された

² 瀧川規一「上田先生を偲ぶ」、『藝文』（京都帝国大学文科大学内 京都文学会）、第7年第9号、大正5年9月、78頁。

³ この作業にあたって、以下の目録を参照した。原 豊「南仏文学・語学・歴史関係文献目録」、『日仏図書館研究』第6号、1980年；同「南仏文学・語学・歴史関係文献目録 補遺版 I」、『日仏図書館情報研究』第17号、1991年。

後も、すぐに軌道に乗ることはなかった。そもそも上田の翻訳・紹介も、イギリスの雑誌に載っていたウィリアム・シャープの論文⁴をもとにしたものであって、わずかな引用を除けば、作品にはほとんど触れずに行われていたのである。しかし、まだごく限られた資料しか輸入されていなかった明治という時代を思えば、貴重な仕事であることは言うまでもない。

ミストラルが1904年にノーベル文学賞を受けたというニュースは、翌1905年、これも外国誌経由で日本にも伝えられたが、次にフェリブリージュ関連の記事が現れるのは、現在分かっている範囲では、4年後の1909年である。この頃、ミストラルはすでにかなりの高齢ながら、自伝的作品『私の生立ち。思い出と物語』(以下、『思い出』と略記)を出版したり(1906年)、ミュゼオン・アルラテン(アルル民俗博物館)を移転・拡充したり(1909年)と精力的に活動を続けていた。また代表作『ミレイユ』の映画化計画が進行したのもこの時期である。

1909年はその『ミレイユ』の出版50周年にあたることから、アルルで記念式典が開催され、広場にはミストラルの銅像が建てられた。日本に伝えられたのは、プロヴァンスにとって記念すべきこの祭典の様態を報じ、あわせて簡単な近代プロヴァンス文学紹介を行った記事である。雑誌『文章世界』の「海外思潮」欄に載せられたこの記事の冒頭の一節を引いてみよう。

近頃プロヴァンスの老詩人フレデリック、ミストラルの出世作「ミレイオ」の出版五十年祭が、プロヴァンスのアルルに催され、且つミストラルの記念碑が除幕された。ミストラルの叙事詩「ミレイオ」の最後の行を書き終へたのは一八五九年の二月二日であつた。この作が出てから近代プロヴァンス語の文學的復活を見たので、オーパネル、ルウマニユ等と共に、フェリーブル詩社を結び、一時南歐の詩壇を風靡したのであつた⁵。

記事は続けて、ミストラルを「プロヴァンスのホメロス」と呼んだラマルティエヌの言葉を引用。更に、「『ミレイオ』に次いで有名なのは詩體小説『ネルト』」で、この作品にはミストラルが友人のドーデと共にダンテの地獄篇に

⁴ William Sharp, « The Modern Troubadours », *The Quarterly Review*, Vol. 194, N° 388, October 1901, p. 474-505.

⁵ 中原青蕪「海外思潮—ミストラル」、『文章世界』第4巻第11号、明治42年8月、102頁。筆者の中原については詳細不明。なお、同じ「海外思潮」中の「片々」で、中原はノルマンディの作家ジャン・ルヴェル(1848-1925)が郷土文学賞を設けたことを伝えているが、その際「彼 [=ルヴェル] は一八四九年の生れで、ミストラルと同じ行方をした作家であるさうだ」と、再びミストラルに言及している。

も出てくるアリスカン墓地に遊んだ折の回想が含まれていると述べ⁶、最後は「彼 [=ミストラル] は今やがて八十の類齢を靜かにプロヴンスの田園に養つてゐる」という一行で全体を締めくくっている。

この紹介文のもとになった記事は明記されていないが、この「海外思潮」の筆者が『文章世界』誌上で繰り返し取り上げているのが、オーストリアの作家ヘルマン・パールの評論であることから、おそらくドイツ語の文献であろうと推測される。『ミレイユ』以外の代表作として『ネルト』(1884年)を挙げていることも、この推測を補強すると考えられる。中世に題を取ったやや暗い色調のこの作品が好評を得て版を重ねたのは、まさにドイツにおいてだからである。

さて『文章世界』にこのミストラル紹介記事が載った1909年、前年廃刊となった第一次『明星』の後を受けるようにして、雑誌『スバル』が創刊された。そしてこの『スバル』に設けられた海外情報欄「椋鳥通信」に、やがてフレデリック・ミストラルの名を伝える記事が数度にわたって現れてくるのだが、その書き手はこの文芸誌に中心的指導者の一人として参加していた森鷗外であった。

鷗外が「椋鳥通信」で取り上げたミストラル関連記事は、1910年と1912年にそれぞれ2回ずつある。まず1910年の5月に「Lis oulivados (橄欖の實を採る女) は Frédéric Mistral が最新の詩集である」と新しい抒情詩集の刊行が告げられ⁷、同年7月には、「Reine du Félibrige」である「Provence 第一の美人」シュヴィニエ夫人の結婚に際して、「詩人 Mistral, Richepin 兩人」が媒酌を務めた、という文脈で紹介されている⁸。

1912年2月には、前年末のメーテルリンクのノーベル文学賞受賞を報じる記事で、歴代受賞者の一人として名が挙げられ⁹、同年10月には「八十二歳の Provence 詩人 Frédéric Mistral が腸の重病に罹つた¹⁰」という情報が伝え

⁶ この記述は誤り。ミストラルがドーデとアリスカン墓地を訪れた思い出を語っているのは、『私の生立ち。思い出と物語』第18章においてである。

⁷ 無名氏(森鷗外)「椋鳥通信」、『スバル』第2年第5号、明治43年5月、127-128頁。題名の *Lis Oulivado* は、フランス語の *olivaison* で、『オリーブの収穫』の意。なお、この出版予告は誤りで、実際に詩集が世に出たのは1912年のことである。

⁸ 『スバル』第2年第7号、明治43年7月、92頁。「フェリブリージュの女王 *Reine du Félibrige*」は、フェリブリージュに参加している女性の中から7年ごとに選ばれた。初代女王はミストラル夫人マリー。シュヴィニエ夫人は4代目の女王であった。

⁹ 『スバル』第4年第2号、明治45年2月、24頁および28頁。

¹⁰ 『スバル』第4年第10号、明治45年10月、187頁。この時のミストラル重病説は誤報だったようである。

られている。いずれもごく短い記事であるが、同時代を生きる南仏詩人について日本に紹介した数少ない例として、貴重なものといえる。

『スバル』は1913年に廃刊となるが、鷗外の海外通信は「水のあなたより」と題を改めて、1914年創刊の雑誌『我等』に引き継がれる。ミストラルについての5番目の通信が現れるのは、この『我等』第1年の7月特別号においてである。

1914年といえば、第一次大戦が勃発した年であるが、プロヴァンスの文学復興運動にとっても大きな危機を迎えた年であった。この年3月、常に運動の中心であったミストラルがふとした風邪から床につき、その後まもなく永遠に帰らぬ人となったのである。「水のあなたより」が伝えたのはまさにこのフェリブリージュ最大の詩人の死であった。

Frédéric Mistral. 八十三歳で死んだ。場所は荘園 Maillane で、即ち一八三〇年九月八日に生れた所である。主な作は *Mirèio* である。一九〇四年に *Sienkiewicz*, *Echegaray* と一しょにノベル賞を得た¹¹。

例によって短い記事で、訃報でありながら死亡の日時（ミストラルが没したのは3月25日）さえ記されていないが、詩人の生涯の重要事項は手際よくまとめられている。ただし、ミストラルと同時にノーベル文学賞を受賞したのはエチエガライのみであるのに、1905年受賞のシェンキェヴィチの名まで挙げるという誤りは含まれているが、ともかく鷗外が4年来伝えてきたミストラル晩年の消息は、詩人の死を以ってここに完結したのである。

鷗外は「椋鳥通信」や「水のあなたより」を書く際に様々な資料を参照しており、すべての記事の出典を明らかにすることは望むべくもないようであるが、このミストラルの訃報に関しては、ドイツの新聞『ベルリン日報 *Berliner Tageblatt*』がその原典と考えられている。この新聞が3月26日（すなわちミストラルの死の翌日）の朝刊に載せた追悼記事の一節、詩人のノーベル賞受賞に触れた件で、エチエガライと並べてシェンキェヴィチに言及していること、翌27日の同紙夕刊に掲載されたミストラルの短編「ナルボンヌの蛙」を鷗外が訳出していることなどが、その主たる根拠となっている¹²。

¹¹（無署名）「水のあなたより」（1914年5月3日発）、『我等』第1年7月特別号、大正3年7月、164頁。

¹² 島中敏郎『蛙』考、『比較文学の小道』、島中敏郎先生論集刊行会（大阪外国語大学フランス会内）、1973年。鷗外訳「ナルボンヌの蛙」の原本を特定するに至った経緯を含め、様々な興味深い論考がまとめられている。

鷗外は外国作家の訃報に接した折に、その作品の翻訳を手掛けることがしばしばあったが、このときもミストラルの死を契機に「ナルボンヌの蛙」の翻訳を行い、訃報とあわせて『我等』7月号に掲載している。これが鷗外の訳した唯一のミストラル作品であり、上田敏の『海潮音』から9年目になされた近代プロヴァンス文学の第二の邦訳ということになる。

『ベルリン日報』をもとにした仕事であるから、独語訳からの重訳ではあるが、『海潮音』の短詩3編が部分訳だったのに対して、「ナルボンヌの蛙」は小品とはいえ全訳である。その点だけをとっても価値ある翻訳といえるが、実はこの鷗外訳の「蛙」は、現在普通に読むことのできるミストラルの『思い出』に収録された版と内容が若干異なっており、その違いが意外な結果を生んでいる点でも興味深い作品なのである。

それでは、このナルボンヌの聖パウロ教会縁起 — 教会の聖水盤に彫りつけられた石の蛙が壊れているのはなぜかという由来を語った物語が、どのように変形されて日本に移入されたかを見てみよう。

この短編の原作は、まずフェリブリージュの機関誌『プロヴァンス年鑑』の1890年版に発表され、その後1906年には、様々な修正を加えた上で、ミストラルの自伝的作品『思い出』第13章に再録されたのだが、『ベルリン日報』に掲載された独語訳は、どちらかというとなら『年鑑』での初出に近い内容となっている。ただし人名や物語の構成などに相当の差異があり、実際に何を底本としたものかは明らかにされていない。

『年鑑』及び『ベルリン日報』に載った「ナルボンヌの蛙」と、『思い出』に収録されたそれとの最大の違いは、物語の結末にある。フランス遍歴の旅から帰った若い指物師ピニョレが、その修行中にナルボンヌの教会の洗礼盤の蛙を見てこなかったことをやはり職人である父に咎められ、休む間もなく再びナルボンヌまで8日もかかる徒歩の旅に出されるところまでは、すべての版に共通している。しかし疲れ切った若者が、こんなに苦しい目にあったのはお前のせいだ、と鎚を取り出して石の蛙に打ちかけた後の展開が違うのである。鷗外訳によって、『ベルリン日報』版の結末を紹介すると、次のようになる。

良久しく水底の蛙を見てみるうちに、此若者の額は次第に赤くなつた。そして憤然として云つた。「ふん。馬鹿な畜生奴。手前のお蔭で、己は此炎天に七日街道を歩かせられた。己が今返報をして遣る。手前がいつまでもグラスのピニョレエを忘れぬやうに、かうして遣る。」

ピニョレエは笈の中から鐵鎚を取り出した。そして力任せに、續け打に蛙を

打った。

傳説によれば、此時水盤の水が忽然鮮血の如く赤く染まつたと云ふことである。

ナルボンヌの市が名物を一つ無くしたのはかうしたわけである¹³。

この結びは、若い職人が鎚で乱打したために、ナルボンヌ名物の洗礼盤の蛙が跡形もなく壊れてしまったかのような印象を与える。初出の『年鑑』の結末も、若者が一打ちで蛙を吹っ飛ばしてしまうところがやや異なっているが、ほぼ同様である。しかし、実を言えばナルボンヌの蛙は、前足こそ一本欠けているものの、今日に至るまで洗礼盤の中に健在である。ミストラルも後になって『年鑑』の結末が事実と相違することに気付いたのか、『思い出』に再録する際に手を入れて、次のように改めた。

「ええ、この畜生め！」指物師は突然、荒々しく叫んだ。「お前のせいだぞ、俺がこの炎天下に 200 里もの道を歩かされたのは！…ようし、お前がグラースのピニョレを、グラースの華と呼ばれるピニョレを、忘れられないようにしてやろう！」

こう言いざま、この乱暴者は、荷の中から鎚と鑿を取り出し、ぱんと一打ちで蛙の足を一本吹っ飛ばしてしまった…。と、突如として聖水が血に染まったように赤くなり、以来聖水盤は赤みを帯びているのだそう¹⁴。

プロヴァンスの詩人たちの作品集となっているとはいえ、『年鑑』は曆という性質上、原則として使い捨てられる運命にある。その意味でも「ナルボンヌの蛙」の決定稿はやはり『思い出』に収録された版と考えられる。しかし日本には、ドイツ紙経由という変則的な移入が行われたために、『年鑑』の初出同様、石の蛙が短気な若者に叩き壊され、おそらくは粉微塵になって消え去った話として伝わってしまったのである。

しかし、蛙がまるごと吹き飛んだというほうが、足が一本なくなっただけより、物語としての印象がはるかに強いのは確かである。訳者の鷗外自身、この砕かれた蛙のイメージには心を打たれたものらしい。1919 年になって、「蛙」と改題した「ナルボンヌの蛙」を巻頭に置く同名の翻訳短編集の出版が決まったとき、鷗外はミストラル作品の内容を踏まえて、次のような「はしがき」を書いている。

¹³ 森林太郎「ナルボンヌの蛙」、『我等』第1年7月特別号、186頁。

¹⁴ Frédéric Mistral, *Moun Espelido. Memòri e raconte* (Mes Origines. Mémoires et récits), Raphèle-lès-Arles, C. P. M. Marcel Petit, 1981, p. 500.

機会はわたくしに此書を公にせしめた。書中の収むる所は皆譯文である。わたくしは老いた。翻譯文藝を提げて人に見ゆるも恐らくは此書を以て終とするであらう。

書は何故に蛙と題するか。プロワンスの詩人ミストラルの作ナルボンヌの蛙が偶然巻頭に蹲つたがためである。

しかし偶然は必ずしも偶然でない。文壇がトロヤの陣なら、わたくしもいつの間にかネストルの位置に押し進められた。其位置は久戀の地ではない。わたくしは蛙の兩棲生活を繼續することが今既に長きに過ぎた。歸りなむいざ、歸りなむいざ。氣みじかな青年の鐵椎の頭の上にうちおろされぬ間に¹⁵。

この一文は、晩年を迎えた鷗外がついに翻譯業、ひいては文壇から身を引くときが来たという感慨を率直に綴った文章として、読者に深い感銘を与えたというが、鷗外がこのような自らの心情を託すことができたのも、彼の参照した版では聖水盤の蛙が完全に叩き壊されていたからであろう。失われたのが足一本であったなら、さして悲壯感も感じられまい。そう考えると、鷗外が『思い出』からではなく、底本不明の独語訳「ナルボンヌの蛙」を訳したのは、ある意味では幸運なことだったともいえる。

以上、1909年以降の数年間に、主として森鷗外によってなされたミストラル及び近代プロヴァンス文学の紹介の跡をたどってみたが、これらの作業はほぼすべてドイツ語の文献に基づいて行われていた。明治末期から大正初頭にかけてのこの時代、南フランスはまだまだ遠かったようであるが、しかし一方で時代は確実に進んでおり、すでにこの頃自ら南仏の土を踏み、その文化に触れた日本人も存在した。鷗外のような著名人ではないが、おそらく同時代の日本人の誰よりも南仏に親しんだと思われるその人物を、次節では取り上げてみよう。

2

再びミストラルの没した1914年まで話を戻すが、この年の5月7日、『東京朝日新聞』の第6面、漱石の連載小説『心^{こころ}』のすぐ後ろに、「巴里へ三度佛國田園詩人逝く」という記事が載った。

本文は連載小説とほぼ同程度の長さがあり、小さいながら写真も添えてある。帽子をかぶった髭の老人が杖を片手に家の前に立ち、開け放された窓のそばに座った黒い犬をなでるような格好でポーズをとっているもので、おそ

¹⁵ 森林太郎『蛙』、玄文社、1919年。

らくは絵葉書の類の複製であろう。写真の説明文には「田園詩人ミストラル翁」とある。見出しからは分かりにくい¹⁶が、3月に世を去ったプロヴァンス語詩人の追悼記事である。

鷗外がこの年7月発行の『我等』誌上の海外通信「水のあなたより」でミストラルの死を報じていることはすでに述べたが、この『朝日』の記事は、さすがに日刊紙だけあって、月刊誌掲載の鷗外の短信に2ヶ月近くも先んじるのに成功している。もっとも、『我等』7月号の海外通信には「5月3日発」という日付が記されており、2つの訃報はほぼ同時期に書かれたものと分かるが、長さだけを比べても、『朝日』の記事のほうがはるかに多くの情報を含んでいるのは明らかである。

事実、鷗外の短信が伝えている内容が、ミストラルの死・彼の代表作の題名・1904年のノーベル賞受賞の3点に尽きているのに対し、「巴里へ三度」には、ミストラルが法学士の資格を持ちながら文学復興に身を捧げたこと、1854年に創刊した『プロヴァンス年鑑』が時折ドーデに短編の題材を提供したこと、代表作『ミレイユ』がグノーによってオペラ化されたこと、そして詩人の生前にその銅像が建てられたことなど、実に様々な情報が盛り込まれている。「巴里へ三度」という見出しのもとになっているミストラルの都会嫌いも忘れられてはいない¹⁶。

しかし何よりも興味深いのは、この『朝日』の記事の執筆者が、外国紙の記述をそのまま敷き写すのではなく、自分自身の言葉で、亡き詩人を追懐していることである。まず記事の冒頭を引用してみよう。

ミストラル翁がこの程天國へ旅された事を知らされました。一八三〇年九月八日に生れた翁は今年恰度八十五歳であります。かのアルフホンス、ドーデとは兄弟も¹⁷皆ならぬ間柄で、共に中年盛りの頃佛國文壇の花と謳はれました。私はその翁を永年の間先生と呼びました吾が兄よと云はれたことを思ひ出すと身慄ひがするほどの感に打たれます¹⁷。

ミストラルを先生と呼び、先方からも「吾が兄よ」と呼ばれた、という記述からすると、書き手はなんらかの形でプロヴァンス語詩人と接触があったのである。それが書簡のやりとり程度であったのか、実際に会って言葉を交わしたことがあったのか、詳しい事情は分からないが、詩人の訃報を受けて「身慄ひがするほどの感に打たれ」という表現を信じるならば、かなり親

¹⁶ ただし詩人が生涯3度しかパリに行かなかったというのはさすがに誇張である。

¹⁷ 「巴里へ三度 佛國田園詩人逝く」、『東京朝日新聞』、大正3年5月7日、第6面。

しく交際していた可能性も考えられる。

それにしても、記事の書き手はどのような経緯で、日本ではさほど知られていないプロヴァンス語の存在を知り、その言語の詩人に近づくに至ったのであろうか。ミストラルとの交流が始まった具体的な契機については、残念ながら筆者は何も語っていないが、プロヴァンス語に心を引かれた理由については記事の中で割合詳しく述べてあるので、再び筆者自身の言葉を借りて紹介すると、次のようになる。

私は一九〇六年に佛蘭西へ行きまして最初の一箇年は南佛アヴェロン縣の片田舎にあるコレージュに在學してゐましたが、私が南佛方言プロヴァンサルに興味を有つ様になりましたのは此時に始まつたのでございます。あの澄みきつた南地方の曠野の空氣に、あの母音の多いそして響きの強い方言をきいた時、私は堪らなく嬉しかつたのであります。壇ノ浦落武者に開化され、大正年代の未だに平家時代の古語その儘を方言として使つてゐる琉球の大島に生れた私は、羅馬の健軍を率ゐて鼓聲勇ましくゴールワの國に攻め入つて来たセザールの其當時の羅馬系の南佛方言プロヴァンサルを懐しく思つたのであります。(「巴里へ三度」)

要するに彼は、フランス語に比べてよりラテン語に近い形を保っているといわれるプロヴァンス語の響きにまず魅せられたのである。しかも、自分が琉球の大島(奄美大島)の出身で、平家時代の名残をとどめている方言の中で育つたために、この南フランスの地方語がいつそう懐かしく感じられたという。文献や資料から得た知識ではなく、筆者の実体験に基づくこのような真情のこもった述懐は、大正初期という時代にあつては実に貴重なものと言わなければならないだろう。

そうなると気になるのが筆者である「私」が誰かということであるが、記事の末尾を見ると、括弧入りで「松岡曙村」と署名がある。しかし肩書その他、この人物に関する情報は一切添えられていない。いったいこの松岡とはどのような人物なのであろう。彼がこの訃報以外に、ミストラルあるいはその他のプロヴァンス語詩人たちについて、なにかしら文章を残していたり、紹介を行つたりした事実はないだろうか。

このような問いを持って、「松岡曙村」についての手掛りを探してみると、まず、この人物が1913年4月から1915年12月にかけて断続的に『東京朝日新聞』に寄稿した複数の記事が見つかる。このうち、1915年11月から12月に連載している「巴里日記より」は、題名通り自身のパリ滞在時の日記をもとにした読み物であるが、筆者に関する個人的な情報もいくらか含まれているので、それらを寄せ集めてみるとだいたい次のようなことが分かる。

まず連載第1回の冒頭には、「昨年二月に歸朝」と断り書きがあり（「巴里日記より（一）」1915年11月26日）、彼が1914年2月には日本に帰っていたことが明らかになる。1906年以來、約8年の歳月をフランスで過ごしたわけである。そのうちで、南仏アヴェロンに滞在していたのは「三箇年ほど」であったが、その後パリに出て、偶然この地方出身の女に会ったとき、「出し抜けに、この地方の國訛の言葉で」話し掛けて相手を驚かせたというから、3年の間に自分自身、南仏の言葉を使えるようになっていたことも確かである（「巴里日記より（四）」11月29日）。

パリに移ってからは学校に通ったのか、仕事をしていたのか不明であるが、折々大使館から呼び出されて「日本から視察旅行にでも来た大官某閣下のため通譯」を務めることもあったらしい（「巴里日記より（五）」11月30日）。彼は1915年の時点で「三十面」すなわち30歳前後と書いているから（「巴里日記より（三）」11月28日）、パリにいたときにはまだ20歳代の若さであり、それも気軽に通訳などを依頼される理由のひとつであったろう。

以上の記事を総合すると、松岡曙村は奄美大島の出身、1880年代半ばの生れで、1906年から1914年まで約8年間フランスに滞在。このうち、最初の3年間は南仏で過ごして土地の言葉を身につけたが、フランス語にも堪能で、パリに出てからは通訳として重宝された、ということになる。ついでながら、松岡は1914年の夏にアヴィニョンを訪れたとも書いているが（「巴里日記より（八）」12月9日）、これが事実なら、彼は第一次大戦開戦の頃、再びフランスに渡っていたのである。

ところで、「巴里日記より」以外の記事を見ていくと、そこにたびたび現れてくるひとつの名前がある。それは彫刻家ロダン（1840-1917）の名である。たとえば、1913年4月10日の「巴里消息」は、当時計画されていた東京でのロダン展開催についての記事であり、同年5月9日には「ロデン翁語草¹⁸」として、彫刻家が折々に語った言葉を記録・紹介しているのだが、注目すべきはこれらの記事がロダンの直接の交流をもとに書かれていることである。松岡は展覧会の相談のために日本大使館を訪れるロダンに同行し、また、パリのアトリエでの仕事を終えて郊外の自宅に帰るロダンを駅まで送りながらその話を聞く。このようにして老芸術家に親しく接する中で書き留めたのが「ロデン翁語草」なのである。

更に1914年6月10日、ミストラルの追悼記事を書いた約1ヵ月後である

¹⁸ 松岡曙村は、「翁の名を誰がロダンと書きはじめ候ものか、佛語にてINをアンと發音する様な事千萬之なく」として、一貫して「ロデン」と表記している。

が、松岡は「ロデン先生へ」の題で、展覧会計画のその後を伝える書簡形式の一文を書いている。丁寧な言葉遣いで、語りかけるように綴られたこの文章を見ると、松岡は生前のミストラルに対しても、同じように「先生」と呼びかける手紙を書いたのではないかと思われ、場合によっては南仏の言葉を折り込みながら「ミストラル翁語草」を書き留めることも可能だったのではないかと想像を逞しくしたくなるのである。

ところでこの時のロダン展企画に松岡を関らせたのは与謝野寛であった。1912年6月中旬、フランス滞在中の寛は晶子と共にこの老大家を訪問し、その際にロダンの方から、日本でデッサンの展覧会を開きたいので便宜を図ってもらえまいかと打診されたのだが、この日2人に同行して通訳を務めたのが松岡だったのである。寛と晶子は当日の会見の様様を、それぞれ「ロダン翁」「ロダン翁に逢ひし日」という文章にしているが、「松岡曙村」の名もそこには忠実に書き留められている¹⁹。

2人がいつ、どのようにして松岡と知合ったかは不明であるが、おそらくパンテオン会と呼ばれていたパリ在留日本人の交流会で出会ったものと考えられる。その理由は、同じ頃パリに滞在していた彼らの友人の画家・石井柏亭が、2人がロダンを訪問する1週間ほど前に、やはり「松岡」という人物とギメ美術館を訪れているのだが、柏亭が松岡を知ったのがこの交流会においてで、そこには晶子も出席していたというからである²⁰。

柏亭の自伝によれば、「未曾有の盛会」であった6月1日のパンテオン会で「松岡」と知合い、その翌日に「ボア・ド・ブローニュの近くにあるサンジョセフの学校に」彼を訪ね、更にその1週間後には連れ立ってギメ老人を訪問したという。この「松岡」が与謝野夫妻に同行した「松岡曙村」である確証はないが、通訳を務めた時期も重なるし、美術に関心があるらしい点でも同一人物である可能性は極めて高いと考えられる。

ところで柏亭の知合った「松岡」は、実は「曙村」とは違う名で呼ばれている。「美術家達と交際のある人としては、滋野男爵、大隈為三、松岡新一郎、和田垣謙三等」がいた、という一節が明らかにしているように、この「松岡」の正式な名は「松岡新一郎」なのである。

それでは「松岡」の本名は「松岡新一郎」で、「曙村」は筆名なのだろうか。それを確かめるためには、「松岡新一郎」とは誰なのかを特定する必要が出

¹⁹ 与謝野寛「ロダン翁」、『東京朝日新聞』、明治45年7月14-17日；与謝野晶子「ロダン翁に逢ひし日」、『新潮』、第24巻第6号、大正5年6月。

²⁰ 石井柏亭『柏亭自伝』、中央公論美術出版、1971年、348-349頁。

てくるわけだが、探してみると、この人物は数年後に意外な場面に登場してくる。1918年11月、第一次大戦が終結すると、日本でも翌年の講和会議に派遣する特使団が組織されたが、そこに西園寺公望の随員の1人として「松岡新一郎」の名が挙げられているのである。そのときの随員紹介記事によると、この人物の履歴は次の通りである。

講和特使西園寺侯随員の一に選ばれた松岡新一郎氏は鹿児島縣の生れ、住友總本店の司計で三十二歳の青年紳士、獨逸協會學校卒業後佛蘭西に遊學しソルボン大學に入り、卒業後巴里近郊の宗教學校で東洋基督教史を講述し滞佛八年、大正四年に歸朝した佛蘭西通である…²¹。

「松岡新一郎」が教鞭を執っていたという「巴里近郊の宗教學校」とは、おそらく石井柏亭が彼を訪ねた「サンジョセフの學校」なのであろう。それはともかく、注目すべきは出身地・年齢・滞仏年数である。出身は鹿児島、1918年末の時点で32歳であるから1886年前後の生れ、そして8年間のフランス滞在。奄美大島出身で1880年代半ば生れ、そして滞仏8年の「松岡曙村」となんとよく重なることか。帰国年こそ1年ずれて記録されているが、上で見てきた複数の資料を読み合わせてみる限り、「新一郎」・「曙村」の2人の「松岡」は、同一人物と見てほぼ間違いないと考えられる²²。

「松岡新一郎」が「松岡曙村」その人であるとみなして、彼のその後の進路をたどってみると、1919年に特使団に従ってフランスに往復した後、1920年8月から1925年5月まで、外務省情報部に囑託として勤務。この間、1924年10月にはフランス政府からレジオン・ドヌール四等勲章など2つの勲章を受けているが²³、これは1922年に開催された日仏交換美術展覧会の事務総長を務めた功績などによるものと思われる²⁴。

外務省時代の松岡は日仏交流の様々な場面で力量を発揮し、フランス側からもその価値は十分認められていた。当時の駐日大使クロードルも、彼は「フランスの感化を及ぼすための、最も有用かつ貴重な人材の一人²⁵」だと評し

²¹ 「三太夫のお役を勤める ヴェルサイユは狭い所だから巴里に泊て通ふ 西園寺侯の随員松岡氏語る」、『東京朝日新聞』、大正7年12月28日、第5面。

²² ただし現時点では確証は得られていないので、「松岡曙村」と「松岡新一郎」が本当に同一人物であるかどうかは、今後の調査で確認したい。

²³ 以上の情報は、外務省外交資料館所蔵の松岡新一郎「経歴書」による。

²⁴ 『美術月報』第3巻第11号、大正11年8月30日、14頁。

²⁵ Paul Claudel, *Correspondance diplomatique, Tokyo 1921-1927*, Gallimard, 1995, p. 314. « l'un des plus utiles et précieux promoteurs de l'influence française à Tokyo, dont j'ai eu souvent l'occasion de vous parler, M. Matsuoka, Secrétaire du Prince Saionji »(30 nov. 1924)

ている。しかし彼の外交活動には1920年代半ばに早くも終止符が打たれており、その後の消息はつかめない。ただ、彼がまだ働き盛りの年で病没したらしいことだけが、ある外務省関係者によって伝えられている²⁶。

ミストラルの訃報の筆者「松岡曙村」が、フランス語の能力を生かして、幅広く活躍したこの「松岡新一郎」であったなら、機会さえあれば、南仏の言語・文化の紹介にも大きな役割を果たすことができただろうが、曙村であれ新一郎であれ、「松岡」の書いたプロヴァンス文学紹介は、現時点では訃報の他には見つかっていない。

しかし、書いた物はなくとも、「松岡」がミストラルについて、知人等に語っていた形跡はある。第一次大戦の続いていた1918年6月、爆撃の続くパリを脱出し、南フランスへと逃れた仏文学者の吉江喬松(号、孤雁。1880-1940)は、ある日友人に誘われて、ミストラルがその一生のほとんどを過ごしたマイヤーヌを訪れ、その日の模様を後に「ミストラルの家」という一文にまとめているが、それによると、吉江を誘った友人(「O君」と呼ばれている)は、「松岡氏」からミストラルの家を訪ねた折の思い出を聞かされたことがあったようだ。吉江と友人が、案内をしてくれたミストラル夫人マリーに送られて、マイヤーヌの家を辞去した際の文章を引いてみよう。

夫人は出掛けようとする私達を戸口から裏庭へ連れて来て、日本から送つてよこしたといふ二株の植物を示した。一つは椿で、一つは茶の木であつた。私達より以前に、この家を訪ねて来た人は松岡氏であつたとO君の話だし、夫人も松岡氏のことを言つてゐたが、その植物が松岡氏からのものであるかどうかは尋ねなかつた。夫人はその木の葉を摘んで記念にとて私達の胸にさしてくれた²⁷。

この件から、ミストラルだけではなく彼の夫人も「松岡氏」を知っていたらしいことが分かる。すでに触れたように、松岡曙村はその「巴里日記より」で、1914年の夏にアヴィニオンを訪れた、と書いていた。この年2月に日本に帰ったばかりで再び渡仏したのが事実なら、彼は詩人の訃報を受けて未亡人を訪ねたのかとも考えられるが、これはあくまでも推測である。

ミストラルの追悼記事から出発して、その書き手・松岡曙村について重点

²⁶ 柳澤健『印度洋の黄昏』(遺稿集)、柳澤健遺稿集刊行委員会、1960年、248頁。なお柳澤は「松岡慎一郎」と書いているが、「西園寺公の秘書」等の説明から、これは明らかに「松岡新一郎」のことと分かる。

²⁷ 吉江孤雁「フランス文藝印象記(三)ミストラルの家」、『新文學』第16巻第1号、大正10年1月、378頁。後に『佛蘭西印象記』(精華書院、1921年)に収録。

的に調査してきたが、直接ミストラルと交流し、文献に頼らず自分自身の言葉でプロヴァンス文学を語った最初の人物として、あえて紹介を試みた。自分自身の南仏滞在に関する記述まである松岡の記事と、外国紙の記事の要約にすぎない鷗外の短信とは、ほぼ同時に書かれたものながら、伝えている内容には質・量ともに大きな差異が認められたが、これは日本がまさにこの頃、プロヴァンスを含む海外との関係において、大きな変化の時期を迎えていたことの一つの証左ではないだろうか。

3

1914年3月にミストラルが世を去った後、5月から7月にかけて日本では2つの訃報が書かれ、また小品の翻訳も1つ発表されて、近代プロヴァンス文学の紹介がここから順調に進展し始めるかと期待させる状況となった。しかしその後間もなく、7月末のサラエボ事件を契機にヨーロッパでは戦争が始まり、8月には日本も参戦、以後数年にわたる世界戦争の火蓋が切って落とされる。

戦争のためばかりでもないだろうが、プロヴァンス文学関係の記事は再び非常に数が少なくなる。しかしこのような時期にも南仏を旅して、本来の専門とはまったく無関係の南仏文学の紹介に一役買うことになった人物がいた。現在も濱田青陵賞に名を残す考古学者・濱田耕作である。

濱田は1913年以来、主としてイギリス・イタリアで研究に従事していたが、1915年の春には英語学者の市河三喜(1886-1970)と共にプロヴァンスを訪れ、ニームのポン・デュ・ガールやアルルの古代劇場跡などを見物している。そして、その折の紀行文を「佛蘭西内の伊太利」と題して『大阪朝日新聞』に送っているが、この中で濱田は、これらの遺跡について語ると同時に、ボーケールを舞台とする『オーカッサンとニコレット』の物語から近代南仏文学復興運動まで、文学関係の事柄にもかなりの筆を費やしている。

考古学者の濱田は、文中で自ら「文学に縁遠い自分」と称しているが、ミストラルや彼を中心とするフェリブリージュの運動についての解説は、簡にして要を得ており、そのうえ文章が独特の節回しを持っていて印象的である。たとえば「彼等プロヴァンス文学復興の仲間『フェリブリヂ』」についての記述は、次のようなものである。

…クロウの砂原に近くヴァントウの雪山の麓、古代と中世の廃址に養はれ葡萄と柑橘の丘に護られて、現れたのはプロヴァンスの郷土詩人である。

古ヘトロヴァードールの詩人の集つた中世のポムペイと稱せらるゝレ・ボーの死
市はアールの東北に近く、羅馬の凱旋門とジュリーの記念塔の今なほ残つてあ
るサン・レミーの村から生れたのは詩人ルーマニユである。其他詩人ミスト
ラルもオーバネルも皆此の黒風に吹き荒される農家の間に呱呱の聲を擧げて、
彼等の血管に通つてゐる希臘羅馬さてはサラセンの南方熱情の血は、或〔は〕
春の日のローヌ河の流れの如く静かに、或は時にミストラルの如く烈しく、或
はクロアの原の如くさびれ、或はヴァントーの山の如くに氣高き調べを産み出
したのである²⁸。

中世のトルバドゥールへの言及もあれば、彼らの後継者たるフェリブリー
ジュの3巨頭、ルマニユ、ミストラル、オーバネルの名も正確に指摘され
ているあたり、なんらかの文献を参照しているのは確実と思われるが²⁹、「春
の日のローヌ河の流れの如く…」以下の数行は、早春のプロヴァンスを訪れ
ていた濱田が、自分の受けた印象をそのまま綴った文章なのかもしれない。

濱田が参考書ばかりに頼ることなく、自分自身、現地でミストラルという
詩人の存在を確かめている様子は、記事の随所に現れている。アヴィニョン
の駅に着いたときには、「プロヴァンスの女と詩人ミストラル自署を印した
る『ミレーユ』の繪葉書を見つけて、己にプロヴァンスの土地の人となつた
のを感じずには居れなかつた」と記しているし、アールに宿をとった日を語
っては、ホテルの前の広場に立つミストラル像を見ながら「アールの客とな
るものは誰でもミストラルと云ふ言葉を覚えぬものはあるまい — 詩人の名
としても或は風の名としても」と述べ、更にホテルの食堂に飾られていた絵
にミストラルの詩句が添えてあつたことまで書き留めている。

そればかりではない。考古学者らしく、まずローマ時代の円形闘技場やア
リスカン墓地、サン・トロフィーム教会などを見て回つた後で、濱田はア
ール民俗博物館を訪れる。そしてその際、連れの市河三喜が博物館の女性館員
に「プロヴァンスの土語を話させ、ミストラルの傑作『ミレイオ』の一冊を
買」い、自分は「柄相應に繪葉書を」求めた、と記しているのだが、おそら
く市河が購入した本を借りたのであろう、濱田は『ミレーユ』第三の歌にあ
る恋歌「マガリの歌」の翻訳まで試みているのである。

「マガリの歌」は、既存の民謡の節にミストラルが歌詞を付けたもので、

²⁸ 濱田青陵「佛蘭西内の伊太利」（4月12日付）、『大阪朝日新聞』日曜付録1-2面、大正4年5月23日。

²⁹ 濱田がこの旅の間、携えていたことが明らかなのはベデカの旅行案内（*Baedeker's Southern France*）。1914年版のベデカには、501頁・504頁などに、フェリブリージュ関係の記述がある。

マグリ（マルグリットの愛称）という名の娘と、彼女に恋する若者との対話形式になっている。マグリは様々に姿を変えて若者の求愛を逃れようとするが、恋人は、彼女が鳥になれば自分は獵師になって捕らえよう、薔薇になるなら蝶になって接吻しよう、もしもマグリが骸となるなら自分は土となって彼女を抱こう、と、どこまでも迫って、ついに娘の心を勝ち得るのである。濱田訳によってその第一連、恋人が最初にマグリに呼び掛ける一節を紹介してみよう。

おう、マグリ、戀しき君、
かうべ頭を窓にさし置き、
オーバード聞けよ暫し我が朝歌、
タムラン此の小鼓の、ヴィウレン此の彈琴の音を。

'O Magali, ma tant amado,
 Mete la tèsto au fenestroun !
 Escouto un pau aquesto aubado
 De tambourin e de viouloun.

星は満てり、彼のあし着に、
 風は落ちぬ、
 されど星は青ざめぬ、
 君を眺むるひまに。

Es plen d'estello, aperamout !
 L'auro es toubado,
 Mai lis estello paliran,
 Quand te veiran !

ここで訳出されているのは全体の3分の1ほどで、残りの部分は「マグリが花とならば、水となつて之に注がむと云ひ…」と対話の流れのみが示されている。研究論文ではないから、翻訳にあたって使用したテキストがどのような版であったかは記されていないが、それがプロヴァンス語＝フランス語の対訳版³⁰であったことは、別の場所で、翻訳者自身によって明言されている。濱田は紀行文を書き終えた直後に改めて「マグリ之歌」の全訳を行い、京都大学文科で発行していた雑誌『藝文』に掲載しているのだが、その前書きに次のような件がある。

ニスニースの客舎に還りて、なほプロヴァンスの山河と詩情を思ふこと切に、こゝにマグリ之歌一篇を譯す、歌は單に地方の一俗謡に過ぎず、たゞ天真流露の趣の掬す可きのみ、ミストラルの詩篇「ミレイオ」に出でたる土語と佛語の對譯に基き、つとめてプロヴァンスの原詩に忠ならむことを欲しぬ…³¹。

³⁰ ミストラルは基本的にすべての作品に自分でフランス語訳を付けている。濱田が参照した『ミレイユ』が何年の版かは不明だが、ミストラル自身の仏語訳が添えられた版という前提に立つて、以下の論を進める。原文引用はルメール書店版をもとにした次の版による。F. Mistral, *Mirèio* (Mireille. Petit format), C. P. M., 1979.

³¹ 濱田青陵「マグリ之歌」、『藝文』第6年第7号、大正4年7月、36頁。

「土語と佛語の對譯」を参照しながらできるだけ原詩に近い翻訳を目指した、という記述を信じるならば、濱田は「マガリの歌」の仏語訳のみならず、原文にも目を通したことになる。しかし濱田は本当にプロヴァンス語の原詩を読んでいたのであろうか。

プロヴァンス語はフランス語と同じロマンス諸語に属しているため、フランス語を解する人が丁寧に対訳を追うならば、相当程度の理解が可能なのは確かである。しかし2つの言語が近似している分、仏語訳は、韻律などとはともかく、内容においてはほぼ完全に原文と一致した直訳となり得るわけで、和訳がどちらをもとに行われたかを見分けることは非常に難しい。濱田訳「マガリ」が本当に原文を参照しているとすれば、それはどのような箇所^{箇所}に反映されているのだろうか。

「マガリの歌」の原文と仏語訳、そして濱田による和訳を読み比べてみると、和訳が「プロヴァンスの原詩に忠ならむ」としているのが明らかに見て取れるのは、語順のレベルにおいてである。原詩は韻を踏むために、語順を調整している箇所があるが、散文である仏語訳はそのような制約にはとらわれないため、通常の語順に戻されている。わずかな差異ではあるが、考古学者はこうした点に留意し、原詩の語順を保った和訳を目指したようだ。

具体的には、たとえば上の引用部5行目の「星は満ちり、彼の蒼^蒼に」。この箇所の原文と仏訳を示すと、次のようになる。

(pr.) *Es plen d'estello, aperamount !*

(fr.) *Le ciel est là-haut plein d'étoiles !*

プロヴァンス語の *aperamount* は副詞で、フランス語の *là-haut* に相当する。すなわち「あの高い所に」の意で、この語自体に「空」という意味があるわけではない。よって仏語訳は、原文では省略されている主語を補う形で、「空は高く、星に満ち」と書き直されているのだが、和訳は主語の省略をそのまま保って、まず「星は満ちり」と言い切り、それから「彼の蒼に」、あの空の高みに、と続けているのである。

また別の例が、歌の終わり方で、マガリがついに恋人の誠意を信じて彼の思いを受け入れ、それに対して若者が喜びを述べる一節にも見られる。まず濱田訳の該当箇所を示そう。

今は實に疑はじ
君の言葉の戯ならぬを

— *Aro coumence enfin de crèire*
Que noun me parles en risent.

さらばこゝに我が水晶の腕輪を
記念に君に贈る。

おうマガリ、忝なや
されど君を眺めては
見よ彼の空の星も、おうマガリ
いかに青み行けるを。

Vaqui moun ancloun de vèire
Pèr souvenir, o bèu jouvènt !

— O Magali, me fas de bèn !...
Mai, tre te vèire,
Ve lis estello, o Magali,
Coume an pali !

この引用の7行目の原文と仏訳は、それぞれ

(pr.) *Ve lis estello, o Magali,*

(fr.) *ô Magali, vois les étoiles,*

となっており、和訳が「おうマガリ」という呼び掛けを後に置いているのは、プロヴァンス語にならったものと分かる。仏訳のみを読んだのであれば、当然「おうマガリ、見よ彼の空の星も」となるはずで、前後の文脈を考えれば、この語順のほうが意味はむしろとりやすい。しかし翻訳者は、おそらく訳文の明快さよりも、原詩の尊重を選択したのであった。

以上の点から、濱田がプロヴァンス語原文を参照したのは事実と分かるが、実にこれが近代プロヴァンス文学が原文および仏語訳から翻訳された最初の例である。上田敏の訳詩は英語から、森鷗外訳の「蛙」はドイツ語からで、フランス語に基づく翻訳すらこの1915年に至るまでは存在しなかったのだから、この「マガリの歌」の全訳はまさに特筆すべき訳業といえる。

濱田はなお、訳文の後に「マガリ」の原詩の一節を掲げ、更に「詩句と相まちて此の南佛郷土の情趣を傳ふ可きか」として略譜まで添えている。『ミレイユ』の附録から取った譜だというのが、旅先で出会った本をよく使いこなしたものである。『ミレイユ』を購入した当の市河三喜よりも、絵葉書ばかり買っていたという濱田のほうが、フランス語とは異なる目新しい言語によほど魅了されたらしい。絵葉書にもプロヴァンス語の詩句が印刷されていたのだから、案外そこから興味を抱いた可能性もあろう。

「佛蘭西内の伊太利」は、1919年に他の紀行文とともに『南歐遊記』としてまとめられるが、この単行本化の際に、濱田は大幅な加筆を行っている。興味深いのは、ポン・デュ・ガール見物記の最後に書き足されたこの橋にまつわる伝説が、ミストラルの『ネルト』にも組み込まれている、と紹介され、15行に及ぶ原詩からの引用まで添えられていることである。

此の橋に就いて面白い説話がある。ポン・ド・ガールが出来上つた時、一番最初に其の上を通過した生者が、悪魔の犠牲に上らなければならなかつた。色々考へた末、一匹の兎を放つて通らした處が、向ふで牙をむいて待つて居た悪魔は、此の偽計にだまされて、齒を食ひしばつて怒つた。其の時石壁に食ひ付いた痕が今も残つてゐると云ふ。此の話を詩人ミストラルが其の詩「ネルト」に取り入れてある。プロヴァンス語の標本券々次に記して見よう…³²。

この後、「*Quand bastiguè lou Pont dóu Gard, / Lou prefachié dóu mau regard / S'èro reserva pèr soun comte, / La proumiero amo, dis lou conte, / Que passarié sus lis arcas...*³³」と引用が続くのだが、悪魔が橋を造る代わりに魂をひとつ要求し、人間の魂ならぬ兎の魂をつかまされて悔しがる、という説話の内容はすでに伝えてあるのだから、あえて原文を添えたのは、プロヴァンス語という珍しい言語を近代南仏文化の「標本」として提示したいという書き手自身の欲求によるに違いない。「マガリ」の翻訳者は偶然知ったプロヴァンス語に本当に愛着を持っていたものとみえる。

ただし濱田が実際に『ネルト』を読んでいた可能性は低いだろう。あくまでも推測ではあるが、この引用はなんらかの文献あるいはパンフレットの類からの又引きと思われる。というのは、わざわざ「プロヴァンス語の標本」として掲げられたこの短い説話の中に、多数の誤植が含まれているためである³⁴。『ミレイユ』から直接写し取られたらしい「マガリの歌」の原詩にはひとつの誤りもなかったことを思うと、ここでの誤植の多くは濱田が参照した文献自体が含んでいたものではないかと考えられるのである。

それにしても、文学的な予備知識を持たずにプロヴァンスを訪れた考古学者が、現地でこれだけいろいろとプロヴァンス文学について知り得たという事実は、注意深い旅行者であれば同様の発見が可能だったことを示しているわけだが、渡仏する人々の多くがマルセイユに上陸したこの当時でも、パリへ向かう道すがらプロヴァンスに遊び、土地の文化に触れた体験を書き残している日本人はあまり見当らない。

しかし、少数とはいえ、実際にプロヴァンスを訪れて自分自身の言葉でこの土地について語る人物が現われ、またプロヴァンス語の作品が部分的にでも原文のまま引用・紹介されたことは、南仏というはるかな土地を身近に感

³² 濱田青陵『南歌游記』、大鏡閣、1919年、151-152頁。

³³ « *Lorsqu'il bâtit le Pont du Gard, / L'entrepreneur au mauvais œil / S'était réservé pour salaire / La première âme, dit le conte, / Qui passerait sur les grands arcs...* »

³⁴ この理由から、上の原文引用（及び前注に示した仏訳）は次の版に拠った。Mistral, *Nerto* (Nerte), C. P. M., 1966, p. 16-17.

じさせるのに役立つであろう。『海潮音』から10年が経過した大正初期、日本とプロヴァンスを隔てる距離は、ゆっくりと、しかし着実に、狭められつつあったのである。

結び

上田敏によって最初の翻訳が発表された1905年から、ミストラルの死の前後までの約10年間に、近代プロヴァンス文学がどのように日本に移入されたかを見てきたが、その際、特に重要な役割を果たした人物として、次の3人を取り上げた。まず、海外通信でミストラルの名を伝え、短編「ナルボンヌの蛙」を独語版から訳した森鷗外、次に、詩人と交流を持ち、その死を感慨をこめて伝えた松岡曙村、そして、南仏を旅してプロヴァンス語に触れ、「マガリの歌」を原語・仏語訳から全訳した濱田青陵である。

彼らは1914年から1915年にかけて、それぞれ翻訳や紹介を行っているが、このうち鷗外と松岡曙村の仕事は1914年3月のミストラルの死を直接の契機としてなされていた。思えば日本に初めて近代南仏文学復興運動の存在を伝えたのは、上田敏が1895年に書いた詩人マチウの訃報であったが、このマチウを含む「プロヴァンスの七星詩派（プレイヤード）」、すなわちフェリブリージュの初期同人7人のうち、最大の詩人であったミストラルもまた、その生涯を終えるとき、最後の光を日本に投げかけるのに成功したのであった。

ところで今、世を去る詩人を消え行く星に譬えたが、ミストラルは自分たちの文学復興運動のシンボルとして、「星」を非常に尊んだ人であった。運動の守護聖人とされる聖エステル（*Estello, Estelle*）の名はプロヴァンス語で星を意味しているし、フェリブリージュの紋章は7本の光を放つ星である。ミストラルは更に、自伝的作品『思い出』の中で、この「星」の祝福を受けた彼らプロヴァンスの詩人たちを、不思議な星に導かれて幼子キリストのもとを訪れた東方の博士達になぞらえることさえしている³⁵。

このようなミストラルの考え方に倣えば、明治時代の日本でまず『明星』、次いで『スバル』（プレイヤード）と、星にちなむ名を持つ雑誌でプロヴァンス文学が紹介されたのも、フェリブリージュを導く聖なる星の成せる業であり、大正初期の主たるミストラル紹介者3人は、南仏の星が放った光を極東で受け止めた「東方の三博士」であったのだと言えるかもしれない。

³⁵ Mistral, *Moun Espelido. Memòri e raconte*, p. 452.

さて、第一次大戦中、近代プロヴァンス文学の紹介はしばし停滞するが、戦後になると鷗外の『蛙』と濱田の『南欧游记』が出版され、またこれらの書物とは無関係に複数の記事や翻訳も現れてくる。なかでも特に目立つのが、松岡の項で紹介した吉江喬松を中心とする一群の人々の仕事である。

後に早稲田大学の仏文科を創設する吉江が、フランス留学中に友人に連れられてマイヤーヌにミストラル夫人を訪問したこと、それを短い訪問記にまとめて発表したことはすでに述べたが、彼の周囲には他にもミストラルに関心を持つ人物がいた。

たとえば、短期間ながら吉江と共に早稲田で教鞭を執っていた椎名其二(1887-1962)は、1910年代の一時期を南フランスで過ごし、その折にフランス各地の地方詩人に関心を寄せるようになっていた。無論プロヴァンスの詩人たちも例外ではなく、講義の際には時折ミストラルの話もしていたことは、椎名の教え子が証言しているところである³⁶。

また、小説家・児童文学者の水野葉舟(1883-1947)は、学生時代の吉江と親交を結んでいた人物であるが、彼は1920年代初頭に上田敏・森鷗外・濱田青陵に続く第四の近代プロヴァンス文学翻訳者となっている。水野が吉江の訪問記を読んでいたかどうかは不明だが、吉江による紹介と水野の翻訳とがほぼ同時期に行われているのは事実である。

このように第一次大戦後数年は、主として吉江喬松の周辺で近代プロヴァンス文学の紹介が進んでいくが、この他にも一部の仏文学者たちがまた別の経路をたどってミストラルやオーバネルの名を知るようになってきていた。それはこの頃、若き日のマラルメと彼ら南仏語詩人たちの交流を物語る書簡が公にされたため³⁷、たとえば鈴木信太郎(1895-1970)は、これを読んでフェリブリージュに関心を抱き、関連書籍の収集を始めたという。

上田敏から森鷗外・松岡曙村・濱田青陵まで、英文学者や考古学者など様々な分野に属する人々によって担われてきた近代プロヴァンス文学紹介が、ようやく仏文学の専門家たちの手に移ったのが1920年前後、すなわち大正半ば以降であったわけだが、この時期の南仏文学紹介については稿を改めて述べることにする。

³⁶ 根津憲三「椎名其二先生のこと」、『フランス文学に沿うて』、駿河台出版社、1987年、195頁。

³⁷ Stéphane Mallarmé, *Lettres de Mallarmé à Aubanel et à Mistral, précédées de « Mallarmé à Tournon »* par Gabriel Faure, Paris, Au Pigeonnier, 1924 ; Charles Chassé, « Lettres de Mallarmé à Mistral », *Mercur de France*, N° 620, 35^e année, Tome CLXXI, 15 avril 1924, p. 397-408 ; (suite) *Ibid.*, N° 621, 1^{er} mai 1924, p. 677-688.